

甲斐市文化財調査報告 第11集
(山 梨 県)

御 岳 田 遺 跡 IV

県道改良工事に伴う平安時代遺跡の発掘調査報告書

2007

山梨県中北建設事務所
甲斐市教育委員会

甲斐市文化財調査報告 第11集
(山 梨 県)

御 岳 田 遺 跡 IV

県道改良工事に伴う平安時代遺跡の発掘調査報告書

2007

山梨県中北建設事務所
甲斐市教育委員会

序 文

甲斐市には、山梨県最古の窯跡である「天狗沢窯跡」をはじめ、7世紀の群集墳である「赤坂台古墳群」、中世民間信仰の好例とされる経筒が出土した「塔之越経塚跡」、日本の治水事業の基礎とされる「竜王川除（信玄堤）」など本市はもとより、山梨県史を解明する上でも大変重要な遺跡が多く残されております。

しかし、県都甲府市に隣接する本市は近年人口の急増が著しく、宅地造成工事や大型商業施設の建設など多くの開発事業が進み、市教育委員会としましても埋蔵文化財を保護するための緊急発掘調査の対応が増加しております。

この「御岳田遺跡」は、古墳時代から平安時代までの人々の生活が凝縮された遺跡であります。周辺の調査結果からもとくに、古墳時代から平安時代にかけては、この地が本県でも最も繁栄した地域の一つであったことがこれまでの発掘調査によって明らかになってきております。

今回報告する御岳田遺跡第Ⅳ次調査は、県道拡幅工事を原因とする緊急発掘調査であり、本書はその調査成果をまとめたものであります。

Ⅳ次調査では平安時代の住居跡や遺物など貴重な資料の発見がありました。

今後は、調査で得られました多くの成果を後世へ伝えるとともに、調査研究、教育普及の資として多くの皆様幅広く活用していただけるよう努めてまいります。

終わりに、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に感謝申し上げます、序といたします。

平成19年2月

甲斐市教育委員会

教育長 中 込 豊 弘







例 言

1. 本書は山梨県甲斐市大下条地内に所在する御岳田遺跡の第4次調査をまとめた発掘調査報告書である。
2. 本調査は山梨県中北建設事務所による県道田宮町・敷島線の道路改良工事に伴い実施され、調査面積は約98㎡である。
3. 各調査は甲斐市教育委員会によって実施され、調査期間は次のとおりである。

試掘調査	平成16年9月6日～9月10日
発掘調査	平成17年7月26日～9月5日
整理分析調査	平成18年7月10日～平成19年2月28日
4. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体者	甲斐市教育委員会
調査担当者	大 崙 正 之 (甲斐市教育委員会生涯学習文化課主任)
調査事務局	甲斐市教育委員会生涯学習文化課文化財担当
5. 本書の執筆、編集及び遺構、遺物の写真撮影は大崙が行った。また、整理分析調査における実測、トレース、図版作成は大崙の指示のもとに須長愛子(甲斐市教委)の協力を得て、長田由美子、高添美智子、小林明美、望月典子、内藤えみ子が行った。
6. 調査に係る経費は山梨県が負担した。
7. 調査にあたり、次の方々よりご教示、ご協力をいただいた。ご芳名を記し、お礼申し上げます。
羽中田壯雄(甲斐市文化財保護審議会委員)、山下孝司・関岡俊明(並崎市教育委員会)、保坂広昭
小野 充(順不同、敬称略)
8. 発掘調査ならびに整理分析調査作業参加者
青山制子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、小林明美、高添美智子、堤 吉彦、内藤えみ子
保延 勇、望月典子、森沢篤美(甲斐市文化財調査協力員)
9. 本遺跡の出土遺物および調査で得られたすべての記録については一括して甲斐市教育委員会に保管してある。

凡 例

1. 挿図の北は磁北を示し、レベルは標高を表している。
2. 遺物挿図中のスクリーン・トーンの内容は次のとおりである。土器断面が白抜きは土師器、 は須恵器、 は灰釉陶器を表す。また、土器内外面の黒色は煤痕、土器内面の  は黒色処理、 は擦り面墨痕の範囲を表す。
遺構図中の  は焼土範囲、 は、硬化面を表す。
3. 遺物番号は本文、挿図、観察表で統一してある。
4. 土器の拓本は、外面底部の採拓は下側、内面底部の採拓は上側に示した。
5. 土器の縮尺は其々に示したが、3分の1を基本とした。
6. 報告書使用の地図は、甲斐市都市計画地図を使用した。

本文目次

序文	
例言・凡例	
第1章 遺跡をとりまく環境	
1. 遺跡の立地と環境	1
2. 御岳田遺跡とその周辺	1
第2章 遺構と遺物	
1. 基本層序	7
2. 竪穴住居跡	7
3. 竪穴状遺構	21
4. 土坑	21
5. 溝状遺構	24
6. 遺構外出土遺物	24
第3章 まとめ	27
報告書抄録	

挿図目次

第1図 御岳田遺跡と周辺の遺跡	3
第2図 調査区位置図	4
第3図 調査区全体図	5, 6
第4図 1号住居跡	7
第5図 1号住居跡出土遺物	8
第6図 2号住居跡・出土遺物	9
第7図 2号住居跡出土遺物	10
第8図 3号住居跡・出土遺物	11
第9図 4号住居跡・出土遺物	12
第10図 5号住居跡・出土遺物	13
第11図 6号・7号住居跡・出土遺物	14
第12図 6号・7号住居跡出土遺物	15
第13図 8号住居跡・出土遺物	17
第14図 8号住居跡出土遺物	18
第15図 9号住居跡・出土遺物	19
第16図 9号住居跡出土遺物	20
第17図 竪穴状遺構・出土遺物	22
第18図 土坑跡・出土遺物	23
第19図 溝状遺構	24
第20図 遺構外出土遺物	25
第21図 墨書資料	26

表 目 次

第1表	1号住居跡出土遺物観察表	8	第9表	9号住居跡出土遺物観察表	20
第2表	2号住居跡出土遺物観察表	10	第10表	竪穴状遺構一覽表	21
第3表	3号住居跡出土遺物観察表	11	第11表	4号竪穴状遺構出土遺物観察表	21
第4表	4号住居跡出土遺物観察表	13	第12表	土坑一覽表	21
第5表	5号住居跡出土遺物観察表	13	第13表	5号土坑出土遺物観察表	21
第6表	6号住居跡出土遺物観察表	16	第14表	6号土坑出土遺物観察表	21
第7表	7号住居跡出土遺物観察表	16	第15表	遺構外出土遺物観察表	25
第8表	8号住居跡出土遺物観察表	18			

写 真 図 版 目 次

図 版 1

図版1-1	調査区全景 (南から)
図版1-2	調査区全景 (北から)
図版1-3	A区全景 (南から)

図 版 2

図版2-1	2号住居跡 (西から)
図版2-2	3号・4号住居跡 (西から)
図版2-3	6号・7号住居跡 (東から)
図版2-4	8号住居跡 (西から)

図 版 3

図版3-1	1号土坑 (西から)
図版3-2	2号土坑 (東から)
図版3-3	3号土坑 (西から)
図版3-4	4号土坑 (西から)

図 版 4

図版4-1	1号住居跡-1
図版4-2	2号住居跡-3
図版4-3	2号住居跡-5
図版4-4	2号住居跡-7

図 版 5

図版5-1	4号住居跡-1
図版5-2	4号住居跡-5
図版5-3	6号住居跡-1

図 版 6

図版6-1	6号住居跡-5
図版6-2	6号住居跡-6
図版6-3	6号住居跡-7
図版6-4	6号住居跡-8

図 版 7

図版7-1	8号住居跡-1
図版7-2	8号住居跡-2
図版7-3	9号住居跡-1
図版7-4	9号住居跡-2

図 版 8

図版8-1	9号住居跡-12
図版8-2	9号住居跡-13
図版8-3	遺構外遺物-2

図版1-4	B区全景 (南から)
図版1-5	C区全景 (北から)
図版1-6	1号住居跡 (西から)

図版2-5	9号住居跡 (南から)
図版2-6	9号住居跡遺物出土状況
図版2-7	9号住居跡遺物出土状況
図版2-8	9号住居跡遺物出土状況

図版3-5	6号土坑 (南から)
図版3-6	1号溝 (西から)
図版3-7	2号溝 (東から)
図版3-8	9号住居跡遺物出土状況

図版4-5	2号住居跡-8
図版4-6	2号住居跡-10
図版4-7	2号住居跡-11

図版5-4	6号住居跡-4
図版5-5	6号住居跡-1

図版6-5	6号住居跡-11
図版6-6	6号住居跡-12
図版6-7	6号住居跡-13

図版7-5	9号住居跡-3
図版7-6	9号住居跡-4
図版7-7	9号住居跡-5
図版7-8	9号住居跡-7

図版8-4	遺構外遺物-5
図版8-5	遺構外遺物-8
図版8-6	遺構外遺物-9

第1章

遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境（第1図）

甲斐市は甲府盆地の北西部に位置し、甲府市の西側に隣接する。市内は地形形状の特徴から大きく4つの地域に分けることができる。

まず、市内北部は、茅ヶ岳、曲岳、太刀岡山など標高千メートルを越す山々が点在する山岳地帯で、急峻な地形を呈している。市西部は、黒富士、茅ヶ岳の火山活動によって形成された台地が広がり、通称「登美台地」「赤坂台地」と呼ばれる茅ヶ岳南麓の丘陵地域となる。市東部は、奥秩父山系の金峰山を源とする荒川が流れ、この荒川によって形成された扇状地となる。市南部は、南アルプス銘岳を源とする釜無川（宮上川）によって形成された扇状地である。

甲斐市は北部から中部にかけて山間地、丘陵地帯となり、南部は市の東西を流れる荒川、釜無川によってできた扇状地となる。市内標高は、最高が北部の1750m、最低が南部の264.9mと標高差1400mを超え、バリエーションに富んだ環境である。

報告する御岳田遺跡は市東部にあり、荒川によって形成された扇状地の扇頂部末端に位置し、微高地上に営まれた集落遺跡である。標高は289mを測る。

2. 御岳田遺跡とその周辺（第2・3図）

本遺跡は、甲府市との境界を流れる荒川と黒富士火山によって形成された通称「登美台地」との間に位置する。この台地と荒川の間（旧敷島町南部）には、南北に伸びる2本の微高地があり、本遺跡は西側微高地上に営まれている。本遺跡は平成4年（1992）の試掘調査によってその存在が明らかとなり、翌平成5年にはじめての本掘調査が実施された。平成17年（2005）までに4回の本調査が行われており、遺跡範囲は現在までのところ南北300m、東西250mの広がりをもつことが明らかになった。今後の調査によって、さらに広範囲になることが予想される。

第1次調査では、古墳時代前、中期の住居跡3軒、平安時代中、後期の住居跡3軒が調査された、さらに古墳時代の祭祀遺構も確認されている。また調査区内の落ち込みから水晶の原石8点と丸玉未製品1点がまともって出しており、玉造工房跡の存在が指摘されている。第2次調査では平安時代前期3軒、中期1軒の住居跡を確認した。さらに第3次調査でもI、II次調査と同時期の住居跡を確認している。

遺跡東方に近接して松ノ尾遺跡が所在する。東の微高地上に営まれた遺跡で、縄文時代から室町時代の長期に亘る複合遺跡である。遺跡の広範囲で古墳時代後期の住居が発見されていることから、同時期の集落が大きく展開していることが明らかとなってきている。また、遺跡中央を東西に横断する都市計画街路愛宕町下条線の周辺から南側にかけては奈良、平安時代前半（8～10世紀）の住居跡など遺構群が出土している。そして、愛宕町下条線周辺から北側にかけて平安時代後半（11、12世紀）から中世にかけての遺構群が確認されている。

住居跡は、各時代を通してこれまでに120軒を超えており、特に古墳時代後期と平安時代全般にかけての遺構が顕著にみられる。住居跡と対比して掘立て柱建物跡の件数は極僅かであり、本遺跡の特徴ともいえる。

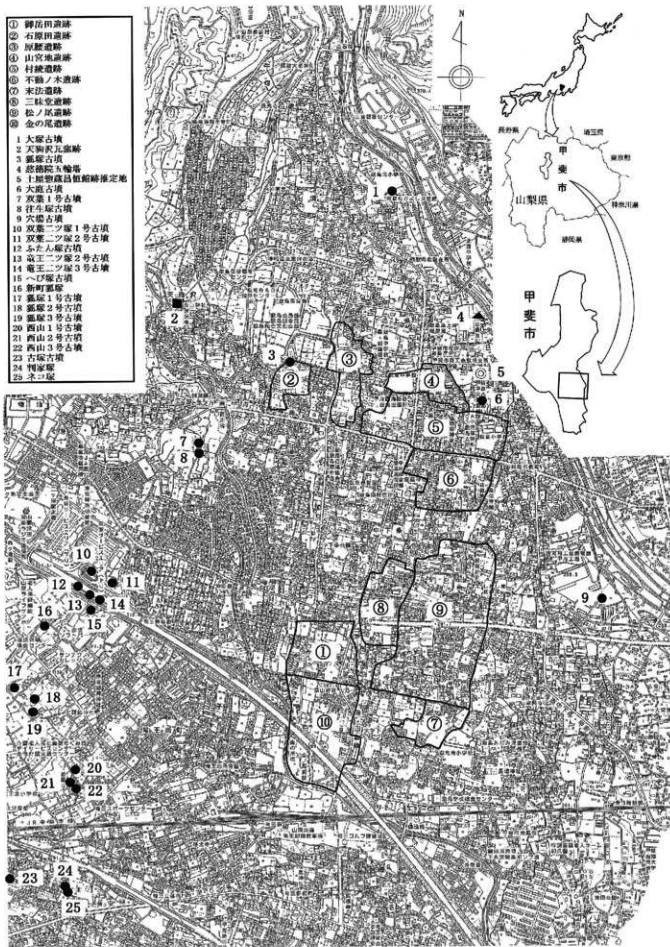
特に古代の遺物に限って見ると、遺構の分布傾向と同様に古墳時代後期の遺物は広範囲に認められる。

奈良、平安時代では、土師器、須臾器、灰釉陶器をはじめ膨大な量の遺物が出土している。特殊な物についてみると、塑像の螺旋、布目瓦、4個体分の円面硯、緑釉陶器（碗、皿、耳皿、稜境）、壺G、貿易陶磁器の白磁、青白磁、青磁類（碗、皿、水注、壺類）、さらに金属製品では帯金具（鉄製鉸具、銅製蛇尾具）、銅鏡片、銅製連繫金具、小金銅仏2軀が挙げられる。

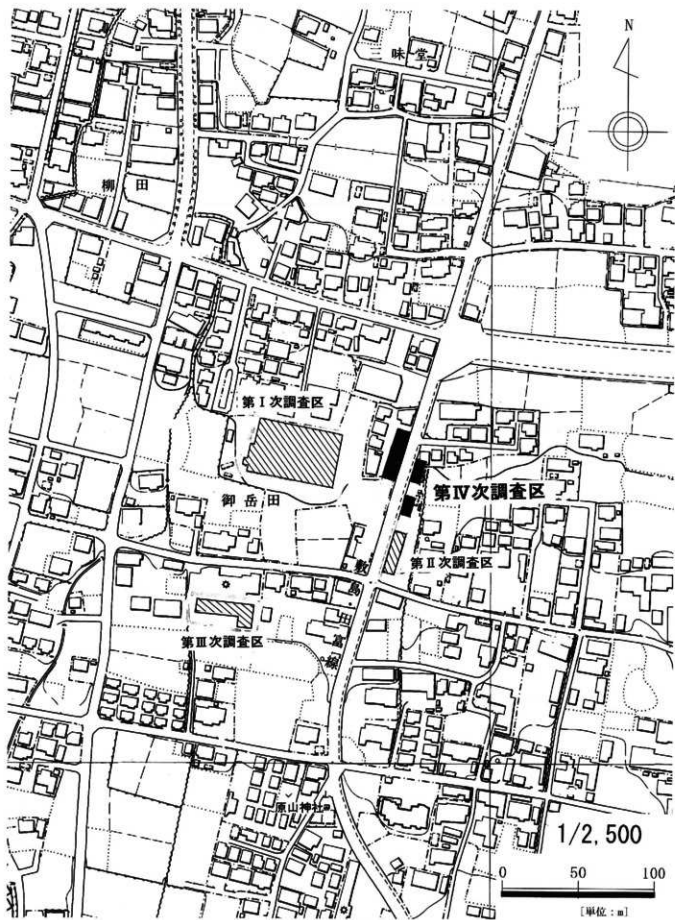
遺跡南方に隣接して金の尾遺跡が所在する。弥生時代後期の住居跡、周溝墓を中心として縄文時代前期から平安時代にかけての複合遺跡である。これまでの調査で、住居跡は縄文時代9軒、弥生時代33軒、古墳時代3軒、平安時代1軒を数える。周溝墓は弥生時代後期23基、古墳時代前期3基の計26基調査されており、これら遺構の西側には幅2.5m、深さ1.45mの溝が長さ55.7mに亘って確認されている。

遺跡西方約600mには通称「登美」、「赤坂」と呼ばれる台地が南北に伸びる。この台地上には赤坂台古墳群と呼ばれる古墳時代後期の群集墳が存在する。

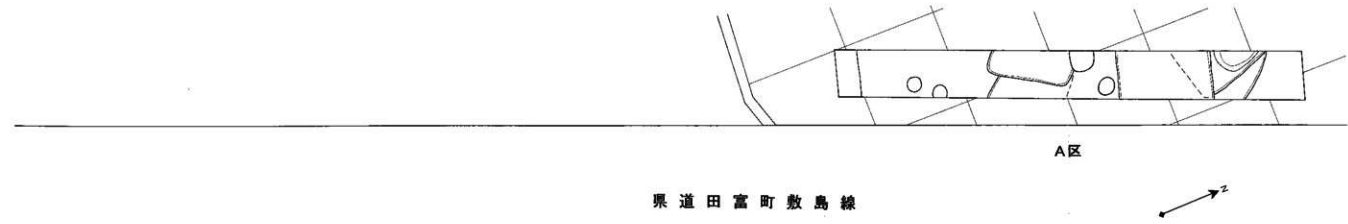
このように、御岳田遺跡を含む周辺地は荒川や貫川によって形成された肥沃な土地であり、さらに微高地上には縄文時代から現代に至るまで連続と人間の生活が営まれてきたことが分かる。また、周辺の遺跡から出土する遺構、遺物は前述したように弥生期にあっては本県における当該期の集落形成や交易を考える上で核となるものであり、古墳期では同時代全般に亘り遺構が確認され、特に後期では古墳群が形成され、一辺7mを超える大型住居跡をもつ集落が展開される。さらに奈良、平安期では古代寺院の存在や中核集落を窺わせるものがあり、本県における古代政治、経済、文化の拠点を醸成させる地域であったといえよう。



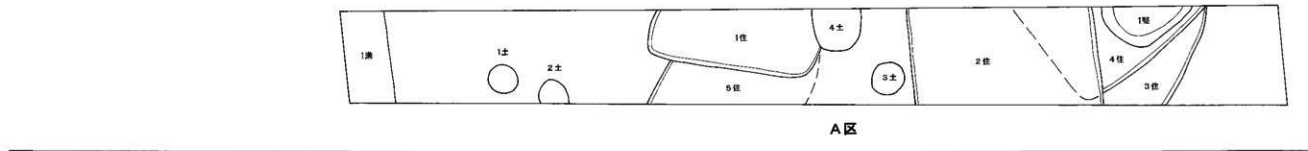
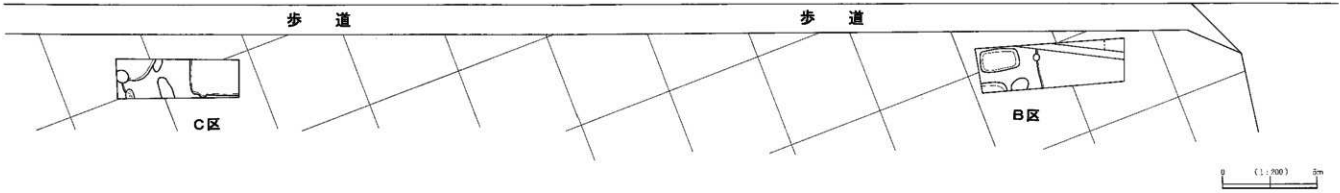
第1図 御岳田遺跡と周辺の遺跡



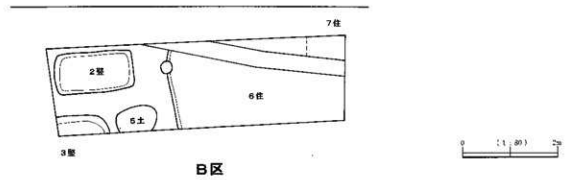
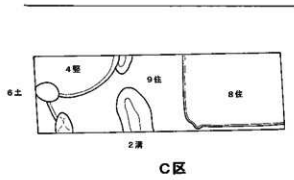
第2図 調査区位置図



県道田富町敷島線



県道



第3図 調査区全体図

第2章 遺構と遺物

今次調査は県道拡幅工事に伴って行われた。工事対象区域内にはすでに民間開発により調査を実施した箇所や試掘調査により遺跡が確認されなかった場所もあり、調査実施箇所は虫食状態の部分的なものとなった。このため調査区域は三ヶ所に分かれており、それぞれ、A区、B区、C区とした。A区は県道西側、B区は県道東側の北に位置し、C区は県道東側の南である。

1. 基本層序

遺跡は荒川によって形成された扇状地上の沖積地に立地する。遺跡東方の荒川に近い松ノ尾遺跡では砂粒を多く含む茶褐色、黒色土の堆積が認められるが、本遺跡では砂粒の割合が少なく、黒色土も認められない。

調査区の基本層序は各調査区とも変化は認められなかった。地表面下20cmまでは盛り土であり、約80cmで遺構確認面となる。遺構はやや黄色を帯びた茶褐色砂質土を掘り込んで構築されていた。

I層 = 表土層20cm 前後の堆積で、各調査区とも造成による盛土である。

II層 = 茶褐色土 造成前の田圃床土層。

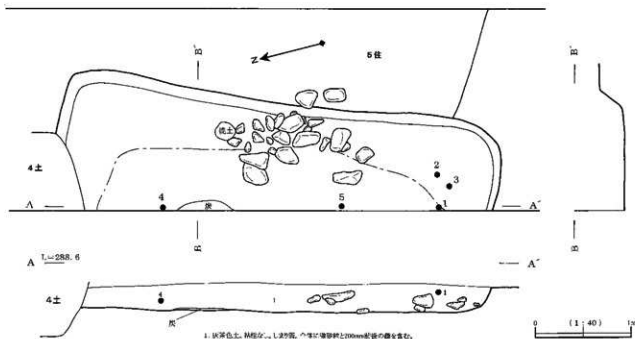
III層 = 暗茶褐色土 粘性弱 砂粒を多く含む。遺物包含層。35cm~40cmの厚みを持ち、主に層下部から遺物が出土する。

IV層 = 黄茶褐色土 粘性弱 砂粒を多く含む。遺構確認面。

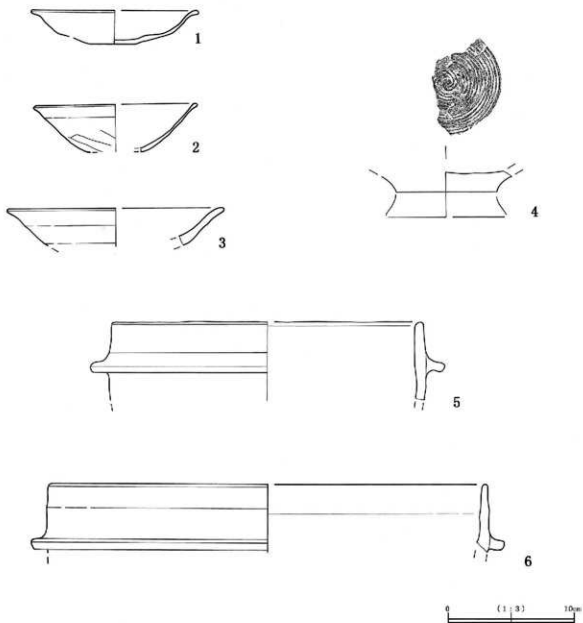
2. 竪穴住居跡

1号住居跡 (第4・5図、図版1・4)

本跡はA調査区に位置し、5号住居跡を切り、4号土坑に切られる形で存在する。住居跡の西側3分の2は調査区外となる。規模は東西が確認された範囲で1.5m、南北4.6m、壁高21cmを測る。平面形は方形で、壁は緩やかに立ち上がり、20cm前後の礫が集中して確認された。床面は平坦で、中心付近に硬化面、西調査区壁との境界に炭化面が認められた。カマド、柱穴は確認されなかった。



第4図 1号住居跡



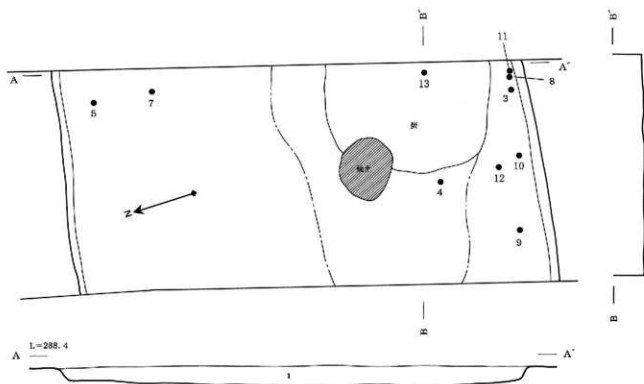
第5図 1号住居跡出土遺物

第1表 1号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図
1	土師器	皿	器高 2.7cm 口径 (13.5cm) 底径 3.6cm	赤色粒子・長石・雲母 緻密	茶褐色	良好	外面下半ヘラ削り 底部ヘラ整形	第5図
2	土師器	坏	推定口径 12.5cm	金雲母・長石	明茶褐色	良好	外面下半ヘラ削り	第5図
3	土師器	坏	推定口径 17.0cm	赤色粒子	淡茶色	良		第5図
4	土師器	脚高台坏		キメ細かい	淡茶褐色	良	内面底部ロクロ回転の痕跡	第5図
5	土師器	羽釜	推定口径 24.0cm	長石多量・金雲母	茶褐色	良		第5図
6	土師器	羽釜	推定口径 34.0cm	長石・石英	暗茶褐色	良		第5図

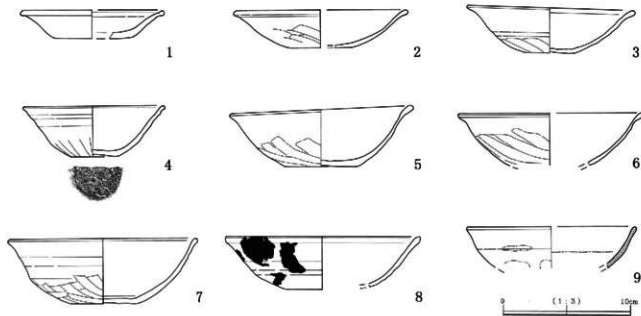
2号住居跡（第6・7図、第2表、図版2・4）

本跡はA調査区に位置し、3号住居跡を切り、4号住居跡と重複する。遺構の東西は調査区外となるため、壁は確認できなかった。規模は東西2.34m（確認範囲）、南北5m、壁高12cmを測る。平面形は方形と考えられ、南北壁は緩やかに立ち上がる。住居南側で、硬化面、焼土面、炭化物が確認された。また、南側を中心に遺物の出土をみた。カマド、柱穴は確認されなかった。

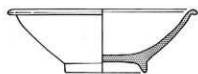


1. 硝子釉色土、紅土質、しずり肌、輪郭的と40mm前後の小石を含む。

0 (1/40) 1m



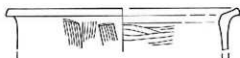
第6図 2号住居跡・出土遺物



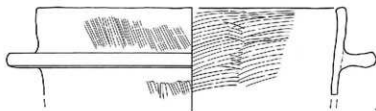
10



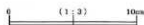
11



12



13



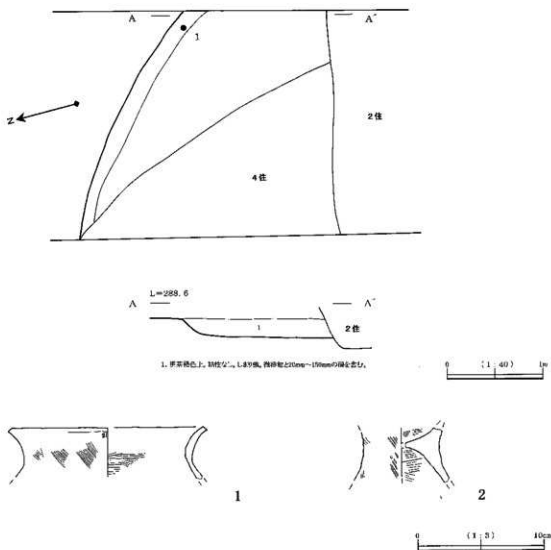
第7図 2号住居跡出土遺物

第2表 2号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	押図
1	土師器	皿	器高 (2.2cm) 口径 (11.0cm) 底径 (6.0cm)	緻密	茶褐色	良好	底部ヘラ整形	第6図
2	土師器	皿	器高 (3.0cm) 口径 (13.2cm) 底径 (4.8cm)	長石・赤色粒子	茶褐色	良好	外面下半ヘラ削り 底部ヘラ整形	第6図
3	土師器	坏	器高 3.7cm 口径 12.8cm 底径 4.1cm	赤色粒子多量	明褐色	良好	外面下半ヘラ削り 底部糸切後ヘラ整形 ロクロ右回転	第6図
4	土師器	坏	器高 4.0cm 口径 10.8cm 底径 3.7cm	赤色粒子多量	橙褐色	良好	外面下半ヘラ削り 底部糸切痕	第6図
5	土師器	坏	器高 4.8cm 口径 14.0cm 底径 5.6cm	金雲母	内面 黒茶色 外面 淡茶褐色	良好	外面下半ヘラ削り 底部糸切後ヘラ整形 ロクロ右回転	第6図
6	土師器	坏	推定口径 14.2cm	赤色粒子	茶褐色	良好	外面下半ヘラ削り	第6図
7	土師器	坏	器高 5.2cm 口径 14.5cm 底径 5.2cm	石英・赤色粒子・ 金雲母	明茶褐色	良好	外面下半ヘラ削り 底部糸切後ヘラ整形 ロクロ右回転	第6図
8	土師器	坏	器高 4.2cm 口径 15.0cm 底径 5.8cm	長石・石英	茶褐色	良好	外面ス付着	第6図
9	灰釉陶器	埴	推定口径 13.2cm	緻密	明灰色	良好	内・外面軸付着	第6図
10	灰釉陶器	埴	器高 5.0cm 口径 14.4cm 底径 6.3cm	緻密	淡灰色	良好		第7図
11	灰釉陶器	壺		緻密	灰色	良	外面軸付着	第7図
12	土師器	長頸甕	推定口径 18.0cm	長石・石英	暗茶色	良	内面横方向のハケ目 外面縦方向のハケ目	第7図
13	土師器	羽釜	推定口径 23.5cm	金雲母	茶褐色	良	内面横方向のハケ目 外面斜め方向のハケ目	第7図

3号住居跡（第8図、第3表、図版2）

本跡はA調査区に位置し、2号、4号住居跡及び1号堅穴状遺構に切られる。また遺構東側は調査区外となる。殆どが重複するため規模、平面形は確認できなかった。壁高は北側で18cmを測り、緩やかに立ち上がる。遺物は2点出土しており、土師器甕及び甕台部である。



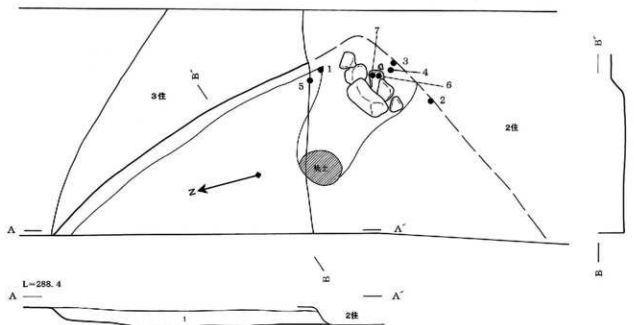
第8図 3号住居跡・出土遺物

第3表 3号住居跡出土遺物観察表

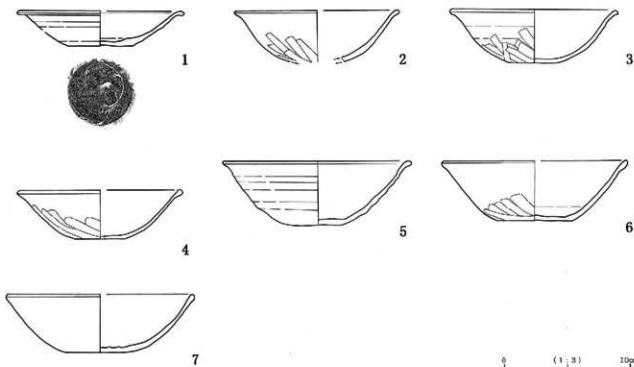
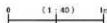
No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図
1	土師器	甕	標準口径 15.0cm	長石・石英・雲母	淡茶色	良	内面横方向のハケ目 外面斜め方向のハケ目	第8図
2	土師器	甕台部		長石・石英	茶褐色	良	内面横方向のハケ目 外面斜め方向のハケ目	第8図

4号住居跡（第9図、第4表、図版2・5）

本跡はA調査区に位置し、3号住居跡を切り、4号住居跡と重複関係にある。遺構西側は調査区外となる。規模は確認できる範囲で、東西2.15m、南北3.9m、壁高12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、平面形は方形と考えられ、南東コーナーに20~50cm大の礫が集中して確認された。さらにその北西よりに40cm範囲の円形に焼土も確認され、礫周辺からは遺物が集中して出土した。2号住居跡との重複により判然としないが、カマドの可能性も考えられよう。柱穴は確認できなかった。



1. 黒灰色土、礫混在、L20中、全体に礫の分布あり。



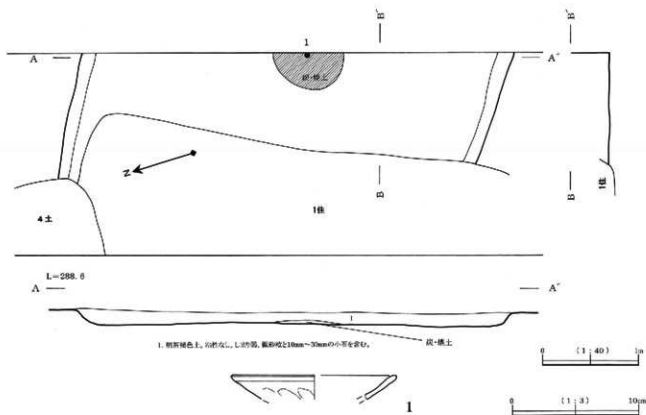
第9図 4号住居跡・出土遺物

第4表 4号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図
1	土師器	皿	器高 (2.8cm) 口径 (12.6cm) 底径 (5.0cm)	緻密 赤色粒子	茶褐色	良好	底部糸切痕	第9図
2	土師器	坏	推定口径 12.5cm	赤色粒子・金雲母	明茶褐色	良好	外面下半へラ削り	第9図
3	土師器	坏	器高 (4.2cm) 口径 (12.8cm) 底径 (3.8cm)	長石・赤色粒子	茶褐色	良好	外面下半へラ削り 底部糸切後へラ整形	第9図
4	土師器	坏	器高 (3.9cm) 口径 (12.8cm) 底径 (4.0cm)	長石・赤色粒子	茶褐色	良好	外面下半へラ削り 底部糸切後へラ整形	第9図
5	土師器	坏	器高 (5.2cm) 口径 (14.5cm) 底径 (3.6cm)	赤色粒子	茶褐色	良好		第9図
6	土師器	坏	器高 (4.7cm) 口径 (14.5cm) 底径 (5.9cm)	赤色粒子	茶褐色	良好	外面下半へラ削り 底部糸切後へラ整形	第9図
7	土師器	坏	器高 (4.6cm) 口径 (14.5cm) 底径 (4.8cm)	長石・赤色粒子	明茶褐色	良好	外面下半へラ削り 底部糸切後へラ整形	第9図

5号住居跡 (第10図、第5表)

本跡はA調査区に位置し、1号住居跡に切られる。また遺構東側は調査区外となり、東西壁は確認できなかった。規模は東西1.15m (確認範囲)、南北4.5m、壁高14cmを測る。平面形は方形と考えられる。東側調査区境界壁際に径80cmの範囲で円形に焼土が確認された。カマド、柱穴は確認できなかった。



第10図 5号住居跡・出土遺物

第5表 5号住居跡出土遺物観察表

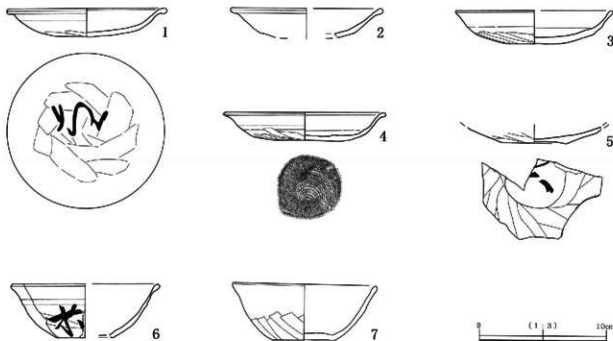
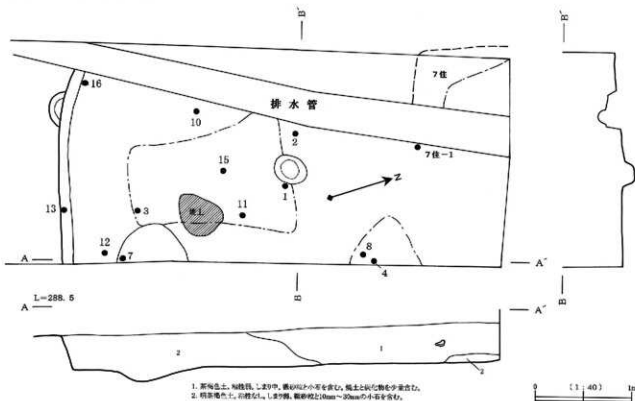
No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図
1	土師器	皿	推定口径 13.0cm	緻密	茶褐色	良好	外面下半へラ削り	第10図

6号住居跡 (第11・12・21図、第6表、図版2・5・6)

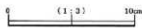
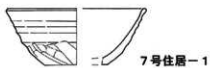
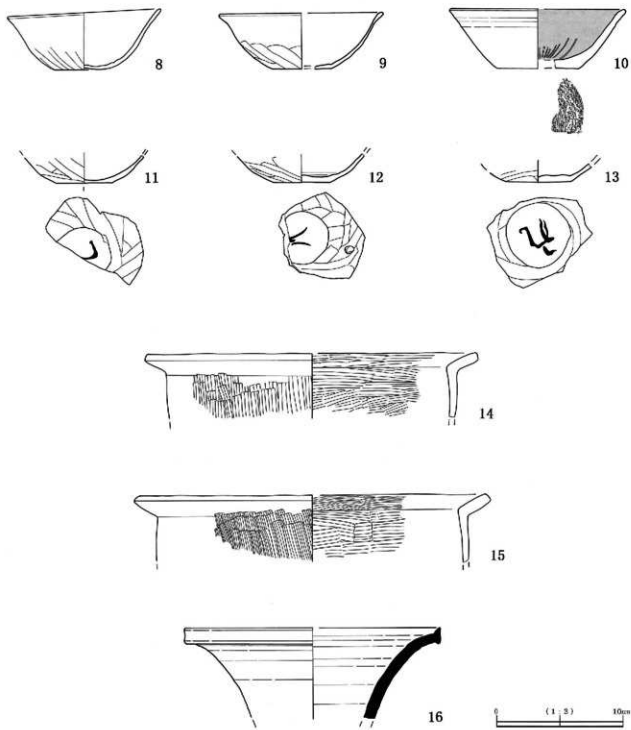
本跡はB調査区に位置し、7号住居跡と重複する。東西及び北側は調査区外となるため、壁は南壁のみの確認となった。規模は東西2.75m、南北4.6m (何れも確認範囲)、壁高36cmを測る。壁は角度をもって立ち上がり平面形は方形と考えられる。遺構中央やや南側に硬化面及び焼土が確認された。遺構中央と考えられる箇所にて径27cm、深さ12cmの柱穴が1箇所確認できた。カマドは確認できなかった。遺構を南北に排水管が縦断する。

7号住居跡 (第11・12図、第7表、図版2)

本跡は6号住居跡と重複関係にある。7号住居床面の精査を行ったところ黒色のプランがかすかに確認された。7号住居床面からおよそ15cmで硬化面を確認したが、攪乱により明確な範囲は確認できなかった。確認できた範囲で東西0.6m、南北1mである。



第11図 6号・7号住居跡・出土遺物



第12图 6号·7号住居跡出土遺物

第6表 6号住居跡出土遺物観察表

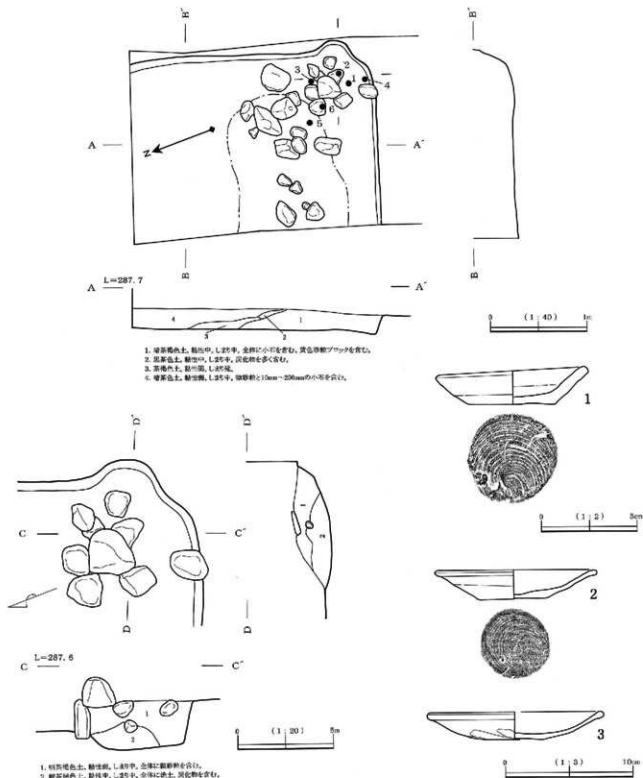
No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	押図
1	土師器	皿	器高 2.3cm 口径 12.3cm 底径 3.5cm	緻密赤色粒子	茶褐色	良好	外面底部黒書有り 底部ヘラ整形	第11図
2	土師器	皿	推定口径 11.6cm	緻密	茶褐色	良		第11図
3	土師器	皿	器高 (2.6cm) 口径 (12.1cm) 底径 (4.2cm)	長石・赤色粒子	明茶褐色	良好	外面下半ヘラ削り 底部糸切後ヘラ整形	第11図
4	土師器	皿	器高 2.3cm 口径 12.2cm 底径 4.8cm	赤色粒子	茶褐色	良好	底部糸切後ヘラ整形 ロクロ右回転	第11図
5	土師器	皿	底径 5.0cm	長石・赤色粒子	明茶褐色	良好	外面底部黒書有り 底部糸切後ヘラ整形	第11図
6	土師器	杯	器高 (4.3cm) 口径 (11.2cm) 底径 (4.4cm)	赤色粒子	暗茶色	良好	外面底部黒書有り 外面下半ヘラ削り	第11図
7	土師器	杯	器高 4.5cm 口径 11.2cm 底径 4.9cm	長石・赤色粒子	明茶褐色	良好	外面下半ヘラ削り 底部糸切後ヘラ整形	第11図
8	土師器	杯	器高 4.8cm 口径 11.8cm 底径 5.5cm	赤色粒子	明茶褐色	良好	外面下半ヘラ削り 底部糸切後ヘラ整形	第12図
9	土師器	杯	器高 (4.4cm) 口径 (12.6cm) 底径 (4.6cm)	赤色粒子	茶褐色	良	外面下半ヘラ削り	第12図
10	土師器	杯	器高 (4.7cm) 口径 (13.5cm) 底径 (6.4cm)	緻密	内面 黒色 外面 淡茶色	良	内黒土器 内面放射状縮文 底部糸切痕	第12図
11	土師器	杯	推定底径 4.4cm	赤色粒子	茶褐色	良	外面底部黒書有り 外面下半ヘラ削り 底部糸切後ヘラ整形	第12図
12	土師器	杯	推定底径 4.4cm	赤色粒子	白茶色	良好	外面底部黒書有り 外面下半ヘラ削り 底部糸切後ヘラ整形	第12図
13	土師器	杯	底径 5.2cm	緻密	茶褐色	良	外面底部黒書有り 外面下半ヘラ削り 底部糸切後ヘラ整形	第12図
14	土師器	甕	推定口径 28.0cm	石英・金雲母	暗茶褐色	良	内面横方向のハケ目 外面縦方向のハケ目	第12図
15	土師器	甕	推定口径 34.0cm	石英・金雲母	茶褐色	良	内面横方向のハケ目 外面縦方向のハケ目	第12図
16	須臾器		推定口径 20.0cm	長石・赤色粒子	青灰色	良好		第12図

第7表 7号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	押図
1	土師器	杯	器高 (4.3cm) 口径 (10.8cm) 底径 (4.5cm)	赤色粒子	茶褐色	良好	底部ヘラ整形	第12図

8号住居跡 (第13図・14図、第8表、図版2・7)

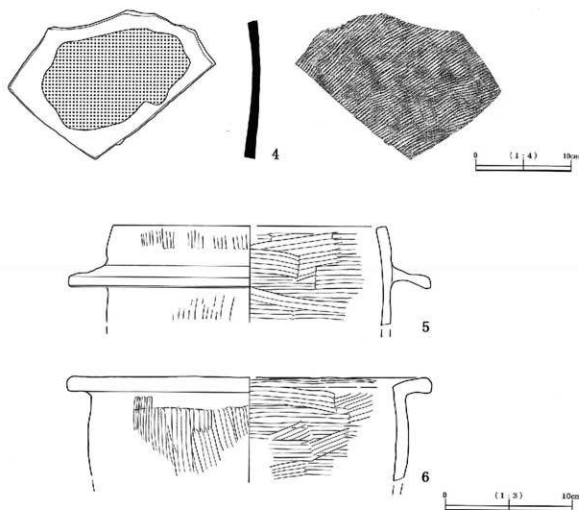
本跡はC調査区に位置し、9号住居跡を切っている。西、北側は調査区外となる。規模は確認できた範囲で、東西1.86m、南北2.58m、壁高は21cmを測る。壁は東、南側で確認でき、東壁は緩やかに、南壁は角度をもって立ち上がる。平面形は方形と考えられ、南東コーナーにカマドを持つ。カマドは川原石を用いた石組みカマドと考えられるが、構築材と考えられる15cm前後の礫が散乱しており残存状況は良くない。長さ20cmの東側袖石が残る。カマド前面に硬化面が残る。柱穴は確認されていない。



1. 黄褐色土、粘り強、L250中、自然の小石を含む、黄色赤鉄質ブロックを含む。
2. 灰褐色土、粘り強、L250中、炭化物も多く含む。
3. 黄褐色土、粘り強、L250中。
4. 黄褐色土、粘り強、L250中、燧石片と10mm-25mm程度の小石を含む。

1. 灰褐色土、粘り強、L250中、自然の礫群を含む。
2. 黄褐色土、粘り強、L250中、赤土に粘土、炭化物を含む。

第13図 8号住居跡・出土遺物



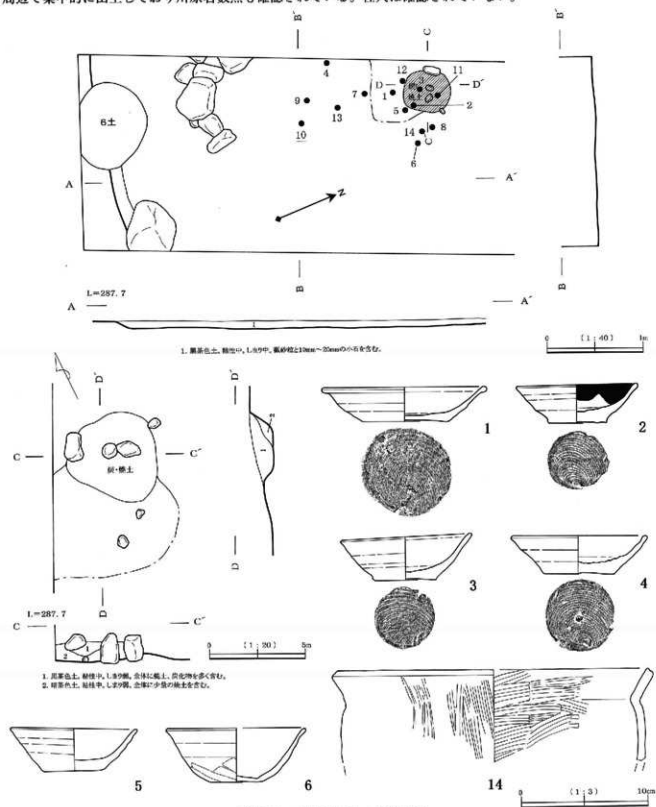
第14図 8号住居跡出土遺物

第8表 8号住居跡出土遺物観察表

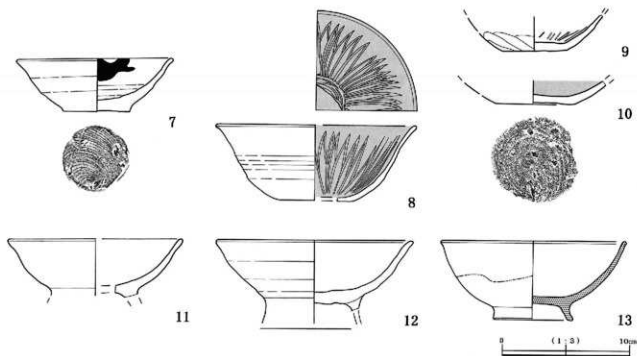
No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図
1	土師質土器	小皿	器高 2.0cm 口径 7.6cm 底径 4.6cm	長石・金雲母	茶褐色	良	底部糸切痕 ロクロ右回転	第13図
2	土師器	皿	器高 2.4cm 口径 12.2cm 底径 5.5cm	長石・赤色粒子	暗茶褐色	良好	底部糸切痕 ロクロ右回転	第13図
3	土師器	皿	器高 (2.2cm) 口径 (13.4cm) 底径 (4.2cm)	長石・石英・金雲母	暗茶褐色	良	外面下半へう割り	第13図
4	須恵器	転用瓶		緻密	灰白色	良好	内面視面 外面斜め方向の叩目	第14図
5	土師器	羽釜	推定口径 20.0cm	長石・金雲母	淡茶色	良	内面横方向のハケ目 外面縦方向のハケ目	第14図
6	土師器	甕	推定口径 28.0cm	キメやや粗	暗茶褐色	良	内面横方向のハケ目 外面斜め方向のハケ目	第14図

9号住居跡 (第15図・16図、第9表、図版2・7・8)

本跡はC調査区に位置し、8号住居跡、4号竪穴状遺構、6号土坑に切られている。また、住居跡直下から2号溝跡が確認されているが、覆土堆積状況から、溝跡埋没後に構築されていることが確認された。東西側は調査区外、北側は8号住居跡となる。確認できた範囲は東西2m、南北3.4mで、壁高7cmである。壁は南側で確認でき緩やかに立ち上がる。西側調査区境界付近で炭化物を含む焼土面が確認された。遺物は焼土面周辺で集中的に出土しており川原石数点も確認されている。柱穴は確認されていない。



第15図 9号住居跡・出土遺物



第16図 9号住居跡出土遺物

第9表 9号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図
1	土師器	皿	器高 (2.8cm) 口径 (12.5cm) 底径 (6.7cm)	緻密・赤色粒子	茶褐色	良好	底部糸切痕 ロクロ右回転	第15図
2	土師器	坏	器高 (3.1cm) 口径 (9.3cm) 底径 (4.5cm)	金雲母・赤色粒子	明茶褐色	良好	内面スス付着 底部糸切痕 内面底部ロクロ回転の痕跡	第15図
3	土師器	坏	器高 3.6cm 口径 10.2cm 底径 4.9cm	雲母	橙褐色	良好	底部糸切痕 内面底部ロクロ回転の痕跡	第15図
4	土師質土器	坏	器高 3.1cm 口径 10.5cm 底径 5.6cm	赤色粒子・長石・石英	橙褐色	良好	底部糸切痕 内面底部ロクロ回転の痕跡	第15図
5	土師器	坏	器高 3.6cm 口径 9.8cm 底径 4.6cm	赤色粒子	淡茶色	良	底部糸切痕 ロクロ右回転	第15図
6	土師器	坏	器高 (4.2cm) 口径 (11.6cm) 底径 (6.0cm)	緻密	茶褐色	良好	外面下半へラ削り 底部糸切後へラ整形 ロクロ右回転	第15図
7	土師器	坏	器高 4.3cm 口径 12.0cm 底径 5.0cm	赤色粒子	茶褐色	良好	内面スス付着 底部糸切痕 内面底部ロクロ回転の痕跡	第16図
8	土師器	坏	器高 6.0cm 口径 15.6cm 底径 5.5cm	長石・石英	内面 黒色 外面 橙褐色	良好	内黒土器 内面放射状暗文 口辺部ミガキ	第16図
9	土師器	坏	底径 5.0cm	赤色粒子	茶褐色	良好	内面放射状暗文 外面下半へラ削り	第16図
10	土師器	坏	底径 5.8cm	長石・石英	内面 黒色 外面 灰茶色	良好	内黒土器 底部糸切痕	第16図
11	土師質土器	脚高高台坏	推定口径 13.2cm	赤色粒子・金雲母	淡茶褐色	良好		第16図
12	土師質土器	脚高高台坏	口径 15.2cm	赤色粒子・金雲母	淡褐色	良好	ロクロ右回転	第16図
13	灰軸陶器	碗	器高 6.3cm 口径 14.2cm 底径 6.0cm	緻密・長石・石英	明灰色	良好	ハケ塗り施軸	第16図
14	土師器	壳	推定口径 24.5cm	赤色粒子・金雲母	茶褐色	良	内面横方向のハケ目 外面縦方向のハケ目	第15図

3. 竪穴状遺構（第17図、第10表）

今次調査では4基の竪穴状遺構が確認されている。1～3号竪穴状遺構は隅丸の方形を呈し、4号遺構は調査区外に延びるため平面形は確認できなかった。遺物は4号竪穴状遺構から土師器環が出土している。

第10表 竪穴状遺構一覧表

番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形状	位置	備考
1号竪穴	120	100	34	隅丸方形	A区	西壁に切られる
2号竪穴	200	105	20	隅丸長方形	B区	
3号竪穴	150	60	18	隅丸長方形	B区	東・南壁に切られる
4号竪穴	180	170	15	不明	C区	西・南端に切られる

第11表 4号竪穴状遺構出土遺物観察表

No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図
1	土師器	環	器高 (5.1cm) 口径 (13.6cm) 底径 (5.0cm)	赤色粒子	明茶褐色	良好	外面下半へラ削り	第17図

4. 土坑（第18図、第12・13・14表、図版3）

今次調査では、6基の土坑が確認された。平面形はすべて円形を呈す。遺物は、5号、6号土坑からそれぞれ土師器甕、鉢片が出土している。

第12表 土坑一覧表

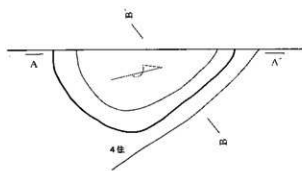
番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形状	位置	備考
1号土坑	75	70	20	円形	A区	
2号土坑	80	42	24	円形	A区	東端に切られる
3号土坑	94	75	20	円形	A区	
4号土坑	122	88	28	円形	A区	西壁に切られる
5号土坑	88	82	18	円形	B区	東壁に切られる
6号土坑	92	66	20	円形	C区	南端に切られる

第13表 5号土坑出土遺物観察表

No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図
1	土師器	甕	推定口径 25.0cm	長石・金雲母	暗茶褐色	良好	内面横方向のハケ目 外面縦方向のハケ目	第18図

第14表 6号土坑出土遺物観察表

No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図
1	瓦器	鉢	推定口径 30.0cm	長石・石英・金雲母	黒色	良好	外面損頭片状	第18図



1. = 288.4

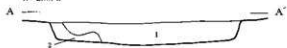


1. 当面土、砂質中、L20中、全周に黒砂粒と3mm前後の小石を含む。
2. 深部土、粘粒質、L120中、黒砂粒が多く含む。

1号堅穴

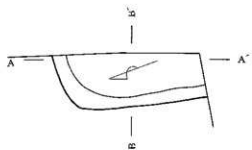


1. = 288.3

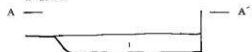


1. 当面土、粘粒質、L120中、全周に黒砂粒を多く含む。
2. 深部土、粘粒質、L120中、黒色黒砂粒を多く含む。

2号堅穴

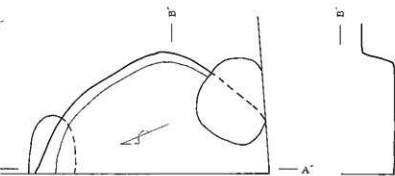


1. = 288.2



1. 当面土、粘粒質、L120中、全周10mm前後の小石を含む。

3号堅穴

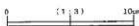


1. = 287.7

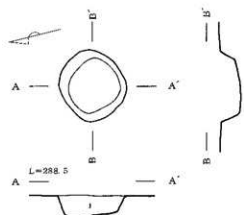


1. 層状褐色土、粘粒質、L120中、全周に黒砂粒を多く含む、小石を含む。

4号堅穴

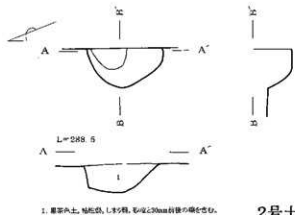


第17図 堅穴状遺構・出土遺物



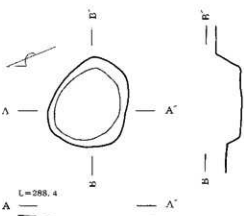
1. 土間色上、粘状質、しりり中、砂礫と5mm前後の小石を含む。

1号土坑



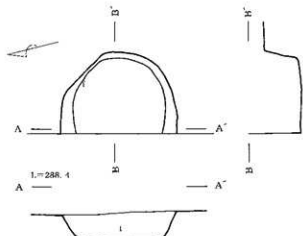
1. 黒茶色土、粘状質、しりり中、毛皮に30mm前後の礫を含む。

2号土坑



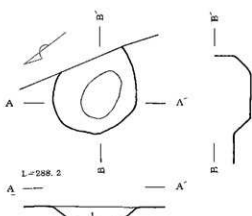
1. 黒灰色上、粘状質、しりり中、全所に砂粒を含む。

3号土坑



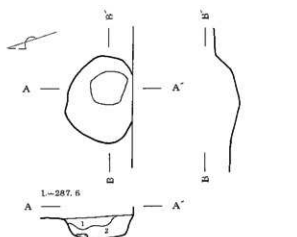
1. 黒茶色土、粘状質、しりり中、10mm前後の小石と黄色ブロックを含む。

4号土坑



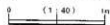
1. 黒茶色土、粘状質、しりり中、10-50mmの黄色粘状ブロックを含む。

5号土坑

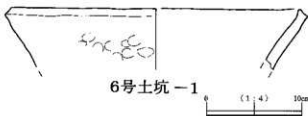


1. 黒茶色土、粘状質、しりり中、今年に造身と5mm前後の小石を含む。
2. 浅茶褐色上、粘状質、しりり中、全所に焼土、炭化物が少量含む。

6号土坑



5号土坑 -1



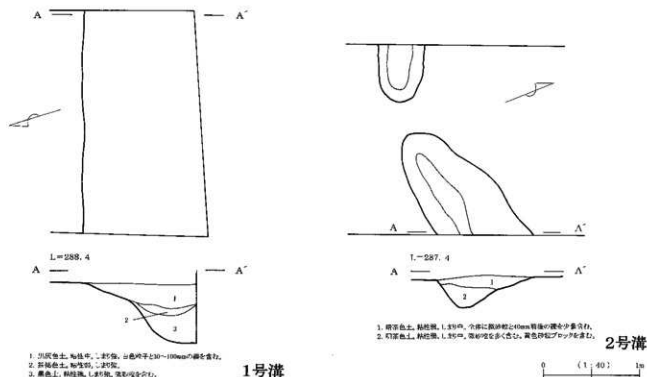
6号土坑 -1

第18図 土坑跡・出土遺物

5. 溝状遺構 (第19図、図版3)

今次調査では、2条の溝状遺構が確認された。1号溝状遺構はA調査区南端で、遺構の南半分が調査区外となる。東西方向に延びており、規模は確認できる範囲で幅1.25m、深さ0.63m、底部はU字型を呈している。

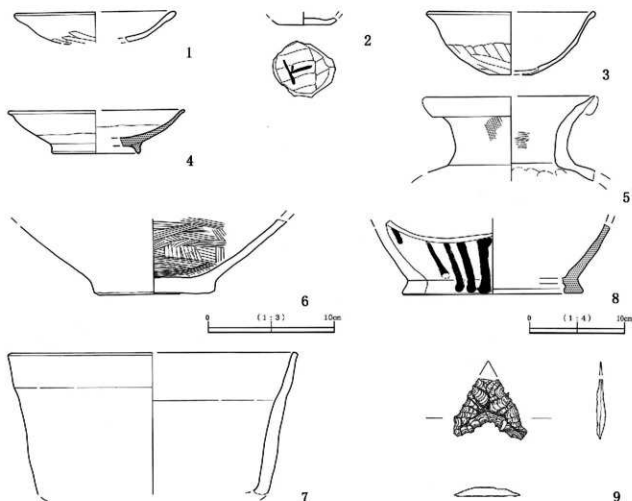
2号溝状遺構は、C調査区に位置する。遺構は東西に延びているが調査区中央で途切れる。規模は確認できる範囲で幅1m、深さ0.32m、底部はU字型を呈す。



第19図 溝状遺構

6. 遺構外出土遺物 (第20・21図、第15表、図版8)

今次調査の遺構外遺物は、多くが第Ⅲ層暗茶褐色土層からの出土である。遺跡一帯は荒川、貫川によって形成された扇状地である。これまでの周辺遺跡の調査で、河川の旧河道や氾濫の痕跡が確認されており、氾濫によって形成された黒色土層から多くの遺物が出土している。本調査における第Ⅲ層は氾濫によるものとは認められないが、出土遺物の内容からその影響を受けている可能性は十分考えられよう。

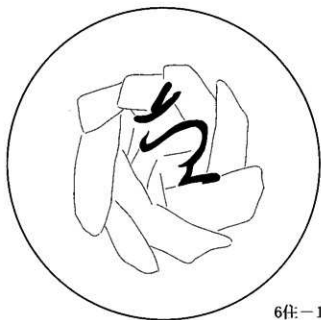


S=1:1

第20図 遺構外出土遺物

第15表 遺構外出土遺物観察表

No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	地点
1	土師器	皿	推定口径 12.3cm	金雲母	淡茶色	良好	外面下半へラ削り	A区
2	土師器	坏	底径 4.1cm	赤色粒子	明茶褐色	良好	外面底部「下」の墨書有り 底部糸切後へラ整形	B区
3	土師器	坏	器高 (5.0cm) 口径 (12.8cm) 底径 (3.4cm)	赤色粒子・金雲母	淡茶色	良好	外面下半へラ削り	B区
4	灰輪陶器	皿	器高 (3.4cm) 口径 (13.6cm) 底径 (6.6cm)	緻密	灰白色	良好	施釉	B区
5	土師器	壺	推定口径 13.0cm	緻密	茶褐色	良	内面横方向のハケ目 外面斜め方向のハケ目 内・外面ミガキ仕上げ	B区
6	土師器	壺	底径 8.8cm	長石・金雲母	茶色	良好	内面ハケ目 外面ハケ目後ミガキ仕上げ	B区
7	土師質土器	鍋	推定口径 30.0cm	長石・赤色粒子	暗茶色	良		C区
8	灰輪陶器	壺	底径 23.0cm	緻密	灰色	良好	外面に輪付着	A区
9	石器	石戯	長軸 (17mm) 短軸 17mm 厚さ 2mm					B区



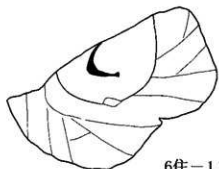
6住-1



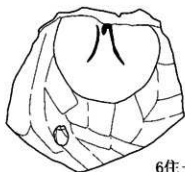
6住-5



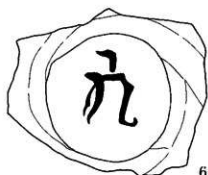
6住-6



6住-11



6住-12



6住-13



遺構外-2

第21回 墨書資料

第3章 まとめ

今回の第4次調査は御岳田遺跡の北東側に位置し、調査区内及び周辺地ではこれまでに3回に亘り発掘調査が実施されている。調査区は第3図調査区全体図に見られるように極めて狭く細長いものであった。そのため、確認された遺構のほとんどは全体を把握しきれなかった。確認した遺構は古墳時代堅穴住居跡1軒、平安時代堅穴住居跡7軒、時期不明堅穴状遺構4基、土坑6基、溝状遺構2条である。住居跡の時期は次のとおりである。

古墳時代	3号住居跡
平安時代 9世紀末～	6号住居跡
10世紀前～	1号住居跡、2号住居跡、4号住居跡、9号住居跡
11世紀後半	8号住居跡
時期不明	5号住居跡、7号住居跡

今次調査は前記したように、各遺構を全掘したのではない。したがって、遺構、重複関係の全容を明確に把握することができず、すべての遺構に対し時期を決定することはできなかった。そのため、上記の時期設定は資料が豊富に出土し確定できるものを固定し、それ以外の遺構は切り合い関係や僅かな遺物から時期区分を行った。

5号住居跡は1号住居跡によって切られているため、10世紀前半より以前の構築と考えられるが、遺物が1点のみの出土であるため、時期は確定していない。また、7号住居跡は、6号住居跡と重複関係にあるが、昭和時代に行った周辺の宅地開発による排水管が遺構の中を通っており、この攪乱などによって住居跡の範囲や重複関係の特定は困難であった。また、住居床面と同じレベルで10世紀前半の上師器塚が1点出土した。住居の範囲確認が困難な状況でもあり、参考資料として掲載した。

今次調査では、2号住居跡及び9号住居跡から灰釉陶器塚が出土している。2号住居跡出土は、美濃灰釉陶器の折戸53号窯式期、9号住居跡出土品は大原2号窯式と考えられる。甲斐市内からは、近年の調査増人によって美濃、東海系陶磁器の出土例が徐々に増えてきている。当該期の社会流通を探るうえでも貴重な資料となった。

C調査区の南側で平成8年に実施された調査では、4軒の住居跡が発見された。時期は9世紀後半から11世紀前半代に収まるものであり、住居跡以外の遺構も含め、今次調査結果と様相は同じである。しかし、平成5年、同15年に今次調査区の西側地域で実施した調査では、4世紀から5世紀後半及び12世紀初頭の住居跡が確認されており、遺跡内における東西地域の様相が僅かではあるが明らかとなってきた。

遺跡東方に所在する松ノ尾遺跡は、10世紀から11世紀を中心とする大規模集落遺跡であることが明らかとなっている。現時点では、御岳田遺跡と松ノ尾遺跡の立地する微高地は分かれており、当該期の集落構成は異なるものと考えられるが、今次調査結果を踏まえ、松ノ尾遺跡との相関関係の有無についても検討する必要がある。

参考文献

- 山下孝司・瀬田正明 1999 「5 奈良・平安時代の編年」『山梨県史 資料編2』 山梨県
大鷹正之 1999 「御岳田遺跡」 敬島町教育委員会
大鷹正之・小坂隆司 2004 「御岳田遺跡Ⅱ」 敬島町教育委員会

写真図版





1. 調査区全景 (南から)



2. 調査区全景 (北から)



3. A区全景 (南から)



4. B区全景 (南から)



5. C区全景 (北から)



6. 1号住居跡 (西から)



1. 2号住居跡 (西から)



2. 3号・4号住居跡 (西から)



3. 6号・7号住居跡 (東から)



4. 8号住居跡 (西から)



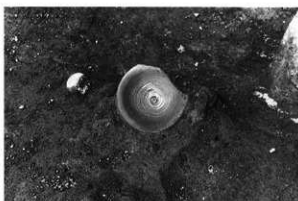
5. 9号住居跡 (南から)



6. 9号住居跡出土遺物



7. 9号住居跡出土遺物



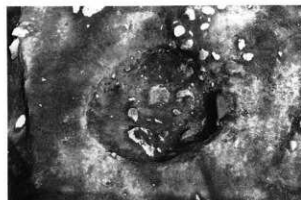
8. 9号住居跡出土遺物



1. 1号土坑 (西から)



2. 2号土坑 (東から)



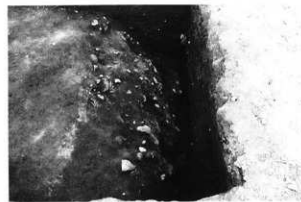
3. 3号土坑 (西から)



4. 4号土坑 (西から)



5. 6号土坑 (南から)



6. 1号溝 (西から)



7. 2号溝 (東から)



8. 9号住居跡遺物出土状況



1. 1号住居跡-1



2. 2号住居跡-3



5. 2号住居跡-8



3. 2号住居跡-5



6. 2号住居跡-10



4. 2号住居跡-7



7. 2号住居跡-11



1. 4号住居跡-1



2. 4号住居跡-5



3. 6号住居跡-1



4. 6号住居跡-4



5. 6号住居跡-1



1. 6号住居跡-5



2. 6号住居跡-6



3. 6号住居跡-7



4. 6号住居跡-8



5. 6号住居跡-11



6. 6号住居跡-12



7. 6号住居跡-13



1. 8号住居跡-1



2. 8号住居跡-2



3. 9号住居跡-1



4. 9号住居跡-2



5. 9号住居跡-3



6. 9号住居跡-4



7. 9号住居跡-5



8. 9号住居跡-7



1. 9号住居跡-12



2. 9号住居跡-13



3. 遺構外遺物-2



4. 遺構外遺物-5



5. 遺構外遺物-8



6. 遺構外遺物-9

報 告 書 抄 録

ふりがな	みたけだ いせき							
書名	御岳田遺跡Ⅳ							
副書名	県道改良工事に伴う平安時代遺跡の発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	甲斐市文化財調査報告書							
シリーズ番号	11							
編著者名	大嵐 正之							
編集機関	甲斐市教育委員会							
所在地	〒400-0105 山梨県甲斐市下今井236番地2							
発行年月日	平成19年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
ふりがな 御岳田遺跡	山梨県 甲斐市 大下条 967番地外	19210	敷-6	35度40分32 秒~34秒	138度31分 25秒~26秒	例言参照	約98㎡	県道改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
御岳田遺跡	集落跡	平安時代	住居跡 溝 土坑	土師器 土師質土器 灰釉陶器				

甲斐市文化財調査報告 第11集

御 岳 田 遺 跡 IV

発行日 2007年（平成19年）2月28日

発 行 甲斐市教育委員会

山梨県甲斐市下今井236番地2

TEL (0551) 20-3658

印 刷 株式会社サンニチ印刷

